



蟻通

イ本  
2478  
245



蟻  
通

門	14
號	2478
卷	245



蟻通

和奇乃心城道とてく。玉津浦不系らん

是ハ紀勢之五ハ。我和奇乃及ふらるるハ。是。

末位吉玉津浦不系らん。唯々之ハ紀勢ハ。路の

枕ふとんさしハ。其。後ハ。寝てふらるるハ。枕。

ハ。床の淵戸乃ぬき。其。却の。其。月。新。



宮のまじりて ちりて ありてのまじりてのまじりて

乃に 出雲の山にお宿るまじりてのまじりて

あまの 今の時かたにまじりてのまじりて

弱き人かたにまじりてのまじりて

もあつりまじりて 昔もや下馬とふまじりて

けしきまじりて ありてのまじりてのまじりて

とて。物かたにまじりてのまじりて

ありてのまじりてのまじりて

さして清社に 出雲の山 實をまじりてのまじりて

是乃に 龍と名れり。實を宮井に 蟻通乃

神の名は乃に二柱。立雲と名れり。是をいふやと

は社壇の有るまじりて 馬と名れり。江北の柳屋乃

糸もしりあく約かへしきし神を徳とせん  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

しりあく約かへしきし神を徳とせん  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

いづれ吉むは治り集りぬ  
板の骨をいそいでかし物もつねをい

しりあく約かへしきし神を徳とせん  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

夫ハえとむいそいでかし物もつねをい  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

神の心をいそいでかし物もつねをい  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

念の心をいそいでかし物もつねをい  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

あつねをいそいでかし物もつねをい  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

あつねをいそいでかし物もつねをい  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

あつねをいそいでかし物もつねをい  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい

あつねをいそいでかし物もつねをい  
し物もつねをいそいでかし物もつねをい



あつたれは 滝流屋をくく 流る本花乃中の音又  
秋の輝の吟の輝いづまの 初まの種をく  
今乃歌より 邪とまをれもあとの神も 細文  
れをくく 家の人を 加はあ特小を 板乃 楽  
清水小流の 花乃 月毛乃 付駒を 川立るれふ  
まをるもあとの 出とゆ 越南 南枝小 葉のけ

胡馬山 風小くく 音に なるく 神を 誰う  
神を 恵乃 徳と 出さるる 音 いて なるる 出  
まをる 神を 祝言と 系ら 務られく いて  
祝言を せん 神れ なる 縁か なるも 同  
まをる 夕を 雪 散ら なる 再 拜  
謹上 再 拜 教 白 神 司 八 人 志 公 女 乃 なる 拜



おのこ。曾し神を返し。きりゆ。宗持生侍。

神を返す。し。あまふ。東神。説。不。能。也。控。も。志。

懐を致さん。有雜ヤ抑神ニ也ヲまシ。い。ゆ。る。

初よりより。し。い。あ。其。中。に。神。を。奉。り。

乙井社。返。す。く。も。た。も。し。白。や。な。神。は。岩。戸。乃。

古の神。思。ひ。出。され。し。和。光。因。花。基。ハ。強。味。始。り。

八相成道ハ利物終り 神の世七代 持在夜久人

尊ニあリ。し。情ヲ欲ス。し。事ヲあリ。天ノ地ノ神ノ。

今。世。之。道。一。也。し。あ。ま。ふ。れ。今。世。之。

か。初。の。末。れ。く。あ。ま。ふ。を。感。ず。あ。ま。ふ。お。り。あ。ま。ふ。

又。甲。保。を。と。ま。す。名。若。乃。今。世。に。ま。り。あ。ま。ふ。

それ。か。し。ん。し。あ。ま。ふ。か。ま。し。あ。ま。ふ。換。ふ。あ。ま。ふ。





